

# 価値あるものが、 代々受け継がれる社会に

有限会社マックユニオン

値引きを強いられるなど、理不尽な経験を何度もしてきました。

ある日、松尾社長は、子どもが大きくなり、自分も家を建てようと思い、設計技師の恩師に相談すると「松尾君なら自分で家を建てられるよ」と背中を押されました。当時流行り始めたユニットバスを取り入れるために、大工やクロスの内装、電気工事業者などが一軒建てられるほどの協力関係ができていたからです。

お客様から「家を建ててもらえないか」と相談されることもたびたびで、意を決して建築業に進出します。ところが取引先からは「領域を侵している」と反発され、やがて設備工事の注文がこなくなります。やむを得ず設備事業を捨てる決断をしましたが、地元にはすでに建築屋さんがいいます。肝心の受注が取れません。



思い悩んでいた最中、ふと小学生のときの担任の先生が見せてくれた一枚のスライド写真のことを思い出しました。ブラジルから帰国したばかりの先生が見せてくれたのは高級住宅の写真で、そこにはアメリカ・KOHLER社製の洋便器が映っていました。バスタブやキッチン等の水

回りを手掛けるKOHLER社の製品は、古くなるほどその価値が高まり、代々受け継がれているブランドとして世界的に知られています。

「これだ！商品に特色がないとダメだ」。松尾社長は直感します。すると、たまたまKOHLER社の便器を使っていたお客様から「どこに頼んでも直せない」と断られた。修理してもらえないか」と相談され、即座に「何とかします」と引き受けてしまいます。



インターネットもない時代。取り扱い会社を必死で調べ、東京に一家だけあることがわかったと、翌日訪問して技術を教わり、無事に修理することができました。お客様は大喜びで「もう一つの家をKOHLERの洋風調で仕上げてくれ」と注文してくれました。松尾社長は全国にはまだまだ需要があることを確信します。

東京デイズニースー内に建設予定のテーマパーク一体型ホテル「ホテルミラコスタ」で、「日本の技術者が必要になる」と本社から電話が入り、同社がその施工を手伝うことになりました。受注も順調に伸びていきます。

◆

事業が好調の一方、松尾社長は地元の空き家が解体されていく光景に胸を痛めていました。なかには、見事な黒檀や桜の木が使用され、建てたときはさぞ自慢の家だったに違いない空き家がいくつもあります。それが取り壊されていく様子はいたたまれないものでした。

松尾社長は決意します。職人さんが腕を磨き、そこに住む家族を守り抜いてきた家を、KOHLERの製品のように代々受け継がれるものにした——。「空き家活用・再生プラン」と名付けて、古き良き昭和のデザインと同社が培ってきた技術を融合させたリフォーム事業に挑んでいるのです。ちなみに社名のマックユニオンとは「息子(mac・意志を受け継ぐ者)の協働隊(union・協力しあい働く隊員のイメージ)」という意味だそうです。